

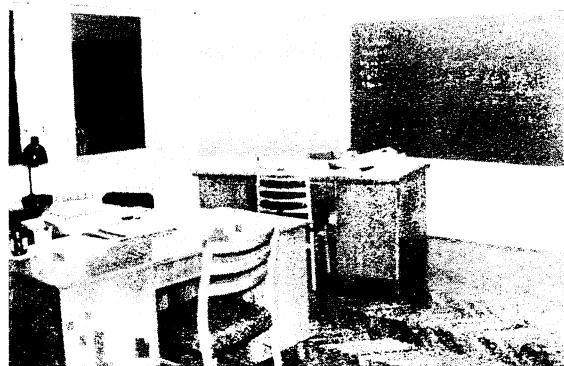
在外研究から④

ブタペスト滞在記

平 澤 茂

昨年10月より4ヶ月余り在外研究員として、前半ハンガリー、後半イタリアを訪問した。ハンガリー・ブタペストは、東欧で最も美しい街として知られ、学術レベルも高く、政治体制も西欧に近い興味深い国であり、ここに簡単に雑感を記したい。気候的には日本にもまして厳しかったが、秋から冬の落ち着いたヨーロッパを味わうことができた。

ブタペストには5年前の夏、学会で1週間程訪ねたことがある。その時より一段と美しく豊かになった感じられた。街角ではロックを歌い踊っているのをみかけるし、ナイトクラブは朝の4時まで営業しており、一見自由主義国と変らない。しかし東欧独特の軍服や日頃見かけることのない赤旗と大きな金



ハンガリー科学アカデミー数学研究所の殺風景な研究室。

色の星印には、一瞬どきりとし無気味に感じられる。物価は安く、西側からの訪問者にとっては大変楽である。折しも円がどんどん高くなりドルが下落しており、食事、買物などクレジットカードで決済することが多かった。

以前に比べクレジットカードは大変普及していた。

ブタペストは地下鉄が発達しており早くて便利である。その他市電(国電?)、バスも庶民の足として、特に市電は深夜に及ぶ四六時中動いている。タクシーも安くたいい500~1000円もあれば充分である。またタクシーを除く交通機関に共通に使えるパスがあり、1ヶ月170Ft(フォリント)÷700円位と交通機関は便利な上に安く、庶民は深夜も堂々とエンジョイしている。コンサートは大きいホールが3つほどあり、ほぼ毎日催されている。日本人のKen Kobayashiはハンガリーで学んだ優れた指揮者であり大変人気がある。彼の指揮する第9は定評があり、チケットはまたたく間に売り切れた。幸い入手できたのが何とわずか800円位である。全く日本の比ではない。また普通のレストランでは、トカイワインが1本600円位、ステーキが800円位で結構美味しい。ただし、高級なものはすべて輸出むけや観光者むけで高級なホテルやレストランにしかなく、これが西側に劣らずめっぽう高い。10月~12月通常のレストランでは新鮮な野菜はほとんどない。この時期貧乏人は肉を食えということになる。ハンガリー料理で有名なグヤーシュも、安い肉も長時間かけて煮込んだシチューである。これがレストランによりわずかつ味の違い

気に入ったものを探し出すのが楽しみでもある。また肉が多いから一般人の肥満に対する関心度も極めて高い。テレビでオーストリアの食事療法などのPRもやっていた様である。物価が安く暮しいいと良いことばかりの様だが、旅行者としてでなくハンガリー人と同様な生活をすればということであり、言葉や習慣の違いなど困ることも多い。ハンガリー製の洗濯機は水が下に溜っており、ドラムに入れた洗濯物が回転するしくみで、これを使いこなせるまでに辞書を片手に半月かかったことを憶えている。寒さが厳しい国ではあるが、一步部屋に入ると古いアパートでも全室暖房完備で、お湯もふんだんにある。エネルギーはソ連より天然ガスを輸入しているため極めて安い。

筆者はハンガリー科学アカデミー数学研究所に通っていた。ハンガリーはあの有名な、Von Neumannを生んだ国であり、伝統的に数学、特に組合わせ数学などの分野が強い。例のキュービックループの国である。現在サッカーボールの様な正12面体が出まわっていた。

しかし流石の数学研究所の人達もこれにはお手あげとか。数学研究所には情報関係を研究しているセクションがあり、Dr. I. Ciszárを中心に東欧ハンガリーの4人組研究者として著名である。Dr. I. Ciszár はあいにくアメリカに留学中で、主としてDr. T. Nemetz にお世話になった。彼等はいずれもいわば東欧での特権階級に属し、時間の使い方は全く自由である。大学の教授達より一段レベルが高く評価され西欧との交流もかな

り自由である。優秀な学生も揃っており、従ってハンガリー科学アカデミーが出す学位が本物なのだそうである。モスクワ科学アカデミーに留学した人の後の空室を借りていた。夫婦子供一人でワンルーム（バス・トイレ付）であり住宅事情はこの国も大変らしい。

日本に対する興味は極めて高く、研究所の人など有識者ばかりでなく街中でも見知らぬ人が、日本人と知ると通じない言葉で懸命に話しかけてくる。よく夕食あとレストランで日本人びいきのハンガリー人が握手を求めてきた。これも枢軸国の名残りか。政治には余りふれなかったが歴史的なつながりの影響は大きいと感じた。なおヨーロッパの風土は現代ビジネス社会の影響を受けつつも伝統を重んじ、ゆったりとした生活パターンを堅持している様である。

この後、イタリアの田舎町トリエステに2ヶ月程滞在し2月末帰国した。図らずも日本の悪名高い単身赴任のつらさを身をもって体験した次第である。帰国後山積した仕事等待着っており、その後遺症は今も完治していない。
（工業経営学科教授）

11月中旬で既に雪景色のブタペスト。ドナウ川をはさんで手前がブタ地区、対岸がペスト地区。

エリザベート橋近くの活気あるペスト地区の中心街。



在外研究から⑤

MITの事

山 本 勝 弘

米国東海岸のボストンは、ちょうど北海道の室蘭位の緯度にあり、広大なアメリカ合衆国の空間的広がりよりも、どこか小じんまりとしたヨーロッパ風の、時間的経過を強く感

れ、上述の建学の精神と共に、アメリカ的特徴を最も良く見現している大学のように思われる。大学は5学部22学科から成り、土木、機械、材料（元金属）、建築等の学科が最も古く、人間社会科学部や経営学科が比較的新しく展開された分野のようである。学部、大学院共授業は相当hardな事で知られ、普段あまり弱音を吐かないMITの学生も、本音を聞くと、“Crazy”とか“MIT prison”とかの言葉が飛び出して来る。昼間5時には、サッと引き上げる彼等だが、夕食後再び、授業の復習やhomn work をやりに研究室に

ていた為、出発前心中おだやかならぬものがあつた。しかし、そのような不安は、MITに到着し、仕事を進めるうちに解消した。というのは、まず実験室の装置が簡素で手作りのものが多い事、又理論面でも、複雑な現象をいくつかの主要な現象に分け、各現象の法則をなるべく簡単な（ほとんど比例式）で表わし、実験値と照合した上で、議論を精密化しようとする姿勢である。特に装置の設計段階では、“目のこ計算”（Back envelope type calculation）でかなりの話が済んでしまうのである。このような事は当